

滞 歐 雜 記 帳 (その二十一)

工 學 士 山 本 峰 雄⁽¹⁾

15. 戰 禍 逃 避 行 (二)

ベルゲンに於ける第一夜は明けて歐洲の情勢は益々逼迫して來た事は此の北歐の小港ベルゲンでもひしひしと感ぜられた。朝食後友人と船を出てベルゲンの町に散策に出る。舷梯には船客への掲示が出て居る。曰く「外出は午後9時迄として午後9時迄には必ず歸船する事」又曰く「本船は速かに出帆する事あるべきに依り其の際は汽笛を數回連続吹鳴するを以て其の際は直ちに歸船すべし」と。

我々はベルゲンの繁華通りに出て昨日の如くズンド百貨店に入つて之からの長い航海に備へてタオルや石鹼から煙草迄様々の日用品を買ひあつめた。何れも米國製品や英國からの舶來品である。百貨店を出て坂を登りやがてフローバーンのケーブルカーの客となつてベルゲンの港を一望の内に收めるフロー山に登る。此處からはベルゲンの碧いフィヨルドと之を圍む美しい緑の山々とが手に取る様に眺められる。北歐の大氣は飽く迄澄み渡つて港も町並も手に取り得るばかりに鮮かに浮上つて居る。我が靖國丸も此處では堂々たる體軀を埠頭に横たへて居る。我々はフロー山の展望臺に倚つて港の朝景色の美しさに時の經つのを忘れて居た。やがて獨逸の一青年とノールウェーの老婦人とがケーブルカーで上つて來て我々の傍で景色に見とれて居た。淡碧の遠山からふと眼を靖國丸の埠頭に落すといつの間にか靖國丸の後尾には

(1) 航空研究所

ニオンジャックの旗を翻した英國の一萬噸級巡洋艦が灰黒色の無氣味な姿を浮べて居るのであつた。我々は一様に何とはなく不安に襲はれて此の巡洋艦はノールウェーの沖に游弋しつゝあると傳へられる英國艦隊の一部が獨逸や我々の船を監視する爲に入つて來たのではないかと考へたのであつた。然し此の疑ひは獨逸の青年の説明で氷解した。此の巡洋艦は英國がソ聯に送つた軍事使節團を乗せて英國に歸る途中ベルゲンに寄港したのであつた。獨逸不可侵條約に依つて外交的敗北を喫したジ。ンブルは此の巡洋艦で英國に逃れるのであつた。然かも此の巡洋艦から沖合に數百米離れた所にはハーケンクロイツの旗を翻した獨逸の貨物船が形勢を觀望して居る。甲板の上迄ノールウェー宛の材木が積上げてある。

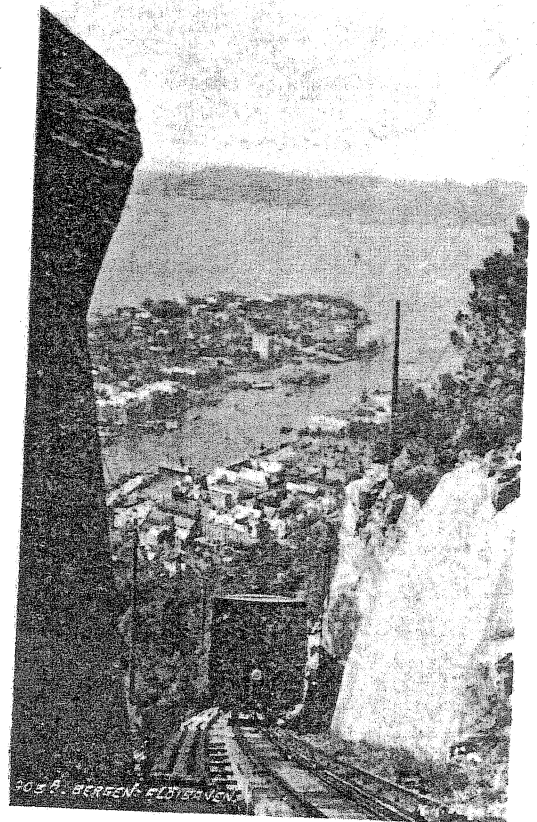
斯くする内に突如港内から鋭い汽笛の音が傳はつて、周圍の山に木魂をかへして來た。我々は靖國丸の出港かとどよめいたのであるが、やがて英國の巡洋艦の右舷に白色に塗つた一隻の哨戒艇が現れた。船尾には見掛けのない星條旗が翻つて居る。米國海軍の哨戒艇キャンベル號で米國財務長官モーゲンソーを運んでベルゲンに來て今又歐洲の情勢迫つた爲モーゲンソーと米國の避難民を乗せて米國に歸るのである。キャンベル號はやがてフィヨルドの入江に姿を沒した。

風雲の前の中立國ノールウェーの港があはただしい動きを見せて居る事はフロー山からの一望に依つて觀取されたのであつた。

我々はフローレストランのテラスに入り美し

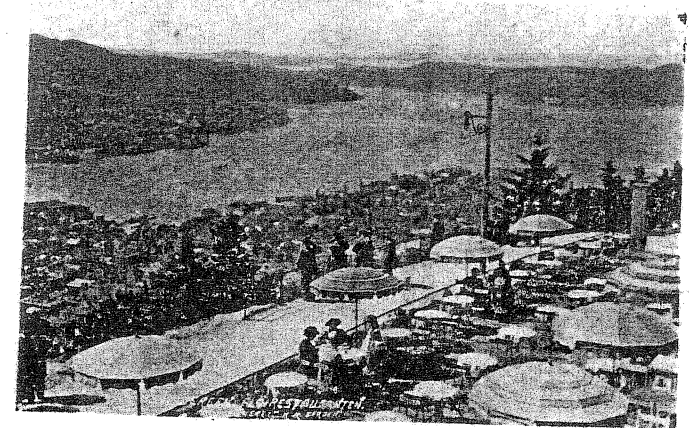
いビーチパラソルの下で港を見下して食事をとつた。此處は歐洲の風雲を外に華かに豪華な食事が待つて居た。靖國丸の一品料理に慣れた我々は此の上ない榮養をとつて外に出た。フロー山の散策路は松の木と樅の木の間に縫つて遙かに山のふところに入つた。到る所にエリカの可憐な花が地に匂つて居た。そして雲に洗はれた岩山の清淨な肌は北國の強い太陽にきらきらと光つて居る。遂に我々は山ふところに抱かれた小さい湖に達した。碧黒い水に積雲を浮べ、水草は灰綠色の華を靜かに水面に漂はして居る。岩を傳はつて落葉松の森蔭に憩ふと此處には數人の可憐な子供が浴みの後にブロンドの髪をほして居る。遙かな向ふ岸には一群の男女が水着姿で岩に腰を下ろして林檎を齧つて居る。華かな水着が冷たい水にあでやかな影を落して人無き池畔に上つた人魚かと疑はれる。湖畔の道を隔てた岩山の中腹には此處にも2人の麗人が水着の上にブルオーバーをつけて自然の寢臺の上に横つて靜かに雲の徂來を眺めて居る。然も自然は靜寂で人の聲も聞かれない。我々は山一つ越えた後に斯くの如き仙境を見出してあわただしい我々の旅や前途の不安を忘れたのであつた。

再び町に降りて今度はチーズや林檎等航海中の食料を買込むと1磅は既に昨日の19 クローネから18 クローネに下つて戦争の危機は急激に迫りつゝある事を知らせる。船に歸つて甲板を散策して居ると橋頭をかすめて一臺のユンカース 52 型水上機が飛來し夕闇迫る山上をフィヨルドの彼方に下つた。ノールウェー國籍の此の飛行機は此の切迫した北歐の空に急がしい逃避行の人々を乗せて居るのだらうと噂し合つて居たのであつた。

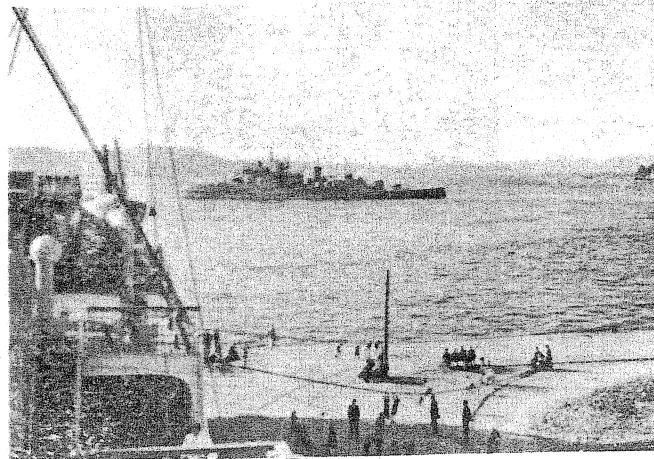


第1圖 フローバーンより見たるベルゲン港

それから一時も経たない夕食後のスモーキングルームに私はなつかしい舊友Yが入つて來て驚きと喜びに手を取りあつて跳り上つたのである。彼は高等學校の3年間を同じ部屋に起居し、リレー

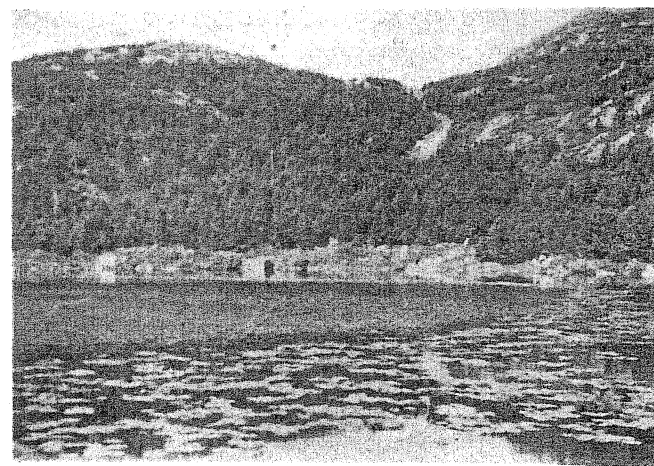


第2圖 フロー山よりの展望



第3圖 船員らの船尾に碇泊する英海軍艦(著者)

には私は2番に當り、彼は3番を走つた中であり、紐帯で會ひ、更に伯林であひ、伯林を離れる2週間前には毎土曜日と日曜には一緒に自動車を借りて伯林郊外からハルツの山地、さてはニトブスの原野を訪ねたのであつた。彼が獨逸の工場見學に出る時には私の下宿に荷物を託され、此の荷物を後に残した儘私はあわただしく伯林を發つてしまつたのである。彼は遂に獨逸に残されるかと心痛して居たのである。相變らず元気な彼の顔が突如スモーキング・ルームに現はれたので夢かと訝り驚いたのは當然であつた。



第4圖 山下の湖(著者)

んだのであつた。

伯林は既に戒嚴令下に在つて重要な建築物の上には高射砲が空を睨み、町の辻々にはサイドカーに乗つた兵士が待機して居ると云ふ事であつた。

我々は彼の話を聞いて彼の爲に大いに乾杯して夜の更けるを知らなかつた。

翌日我々は再びYと共にフロー山に登つた。フローレストランの前を港に臨んだ散策道を辿つてフロー山の突角に出て此處に設けられた山小屋の側に腰を下ろして獨逸の思出を語合つた。北緯

61度の山上の大氣は一呼吸毎に健康な眠を催さ

した。エリカの深々としたしとねの中に我々は仰いで紺碧の空を眺めて居る内にいつしか眠つてしまつた。小1時間も眠つたであらうか、私は友の聲に眼をあげると彼は「おい、君はいびきをかいて居たぞ」と笑つて居る。然し彼も數日來の疲れでエリカの花の中で安堵のいびきをかいて居たに違ひなかつたのである。

斯くてベルゲンの不安と悠々たる氣持の交錯した生活は1日1日と流れて行つたのである。

彼は悠々と歐洲の見學をすませて伯林に歸つて見ると既に戦時状態で漢堡行きの汽車は僅かに1日1列車となりしかも靖國丸は既にベルゲンに到着して居たのであつた。北海は既に一切の船の通行が禁止されて居る。最後の手段として1日僅かに1本しか出ない3等車のみ汽車に身を託してコペンハーゲンに渡り深夜ノールウェーの國境を突破してクリスチャンゼンに辿りついて、遂に旅客機を見つけて此處北歐の一角に飛

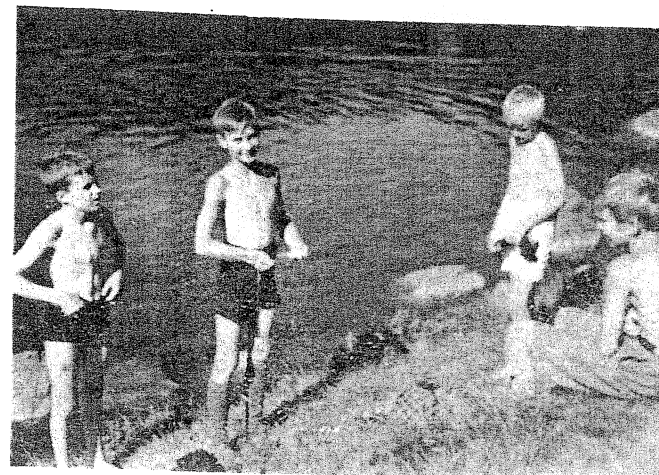
船中では多數の子供が政情等は外に終日甲板でさわざり、泣いて居た。良人を伯林に残して來た婦人連は再び歐洲の風雲が納まつて良人の下に歸れる事を願つて1日も長くベルゲンに停まる事を主張した。國際情勢の逼迫を知つて居る我々は1日も早くベルゲンを出て戦禍を遠く大西洋に逃げる事を願つて居た。船内の空氣は斯くて複雑になつて來つゝあつた。

しかし國際情勢は愈々危機を増しつゝあつたのである。此處ベルゲンのフィヨルドの南方には英國の航空母艦と艦隊が游弋して、艦上機がフィヨルドの中に不時着したと云ふニュース、ベルゲンフィヨルドの出口で獨逸の船が英艦に撃沈されたと云ふ浮説が町を横行して居る。

8月30日にはソ聯は60萬の軍隊を動員して北部ポーランドの國境に集中して獨逸と共にポーランドを併呑する態勢を整へ オランダとスキスも動員を完了しノールウェーは海軍の動員を行つて靖國丸の附近にはノールウェーの水雷艇が頻繁に往復する様になつた。英國は既に海軍の配備を終つたと云はれる。

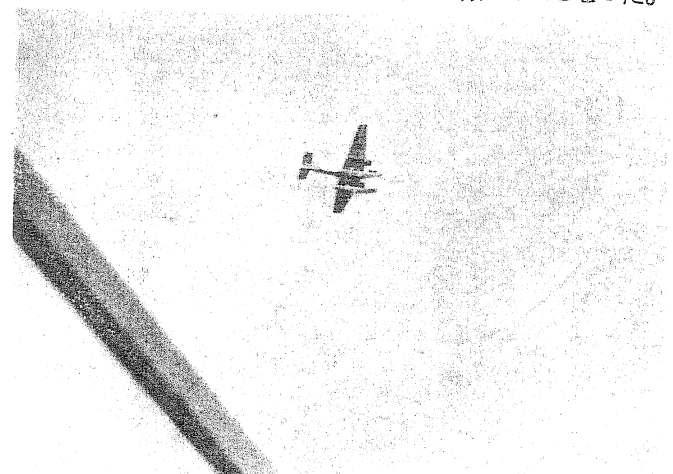
靖國丸は既に船腹に大日章旗を畫いた。黒い船腹に鮮かな日章旗を見て我々は祖國の國旗の下にあらゆる苦難を嘗して長い北洋の航海に堪える事を誓つたのであつた。サンデツキと船首の甲板にも日章旗が取付けられた。之等の日章旗と船尾の日章旗とそして煙突の日本郵船のマークは夜間照明を施して日本の船である事を示す様に設備が出来上つた。

然し問題は燃料と食糧であつた。



第5圖 山下の湖に於ける水浴(著者)

ストックホルムからは我が大使館のH書記官が單身ベルゲンに乗込んで、毎日ノールウェー當局と燃料と食糧の積込を交渉したのであつたが、戦時を控へて其の希望は遂に達せられなかつたのである。此の國は完全に英國派であり又米國の勢力下にあつた。1日靴を求めにとある靴店に入ると賣子の若い娘は私の靴を見て之は伯林製であらうと云ひヒットラーの靴は憎らしいと云つて拳で靴を打つ眞似をしたりした。新聞はフランス軍の寫眞を掲げ佛軍強しと宣傳して居る。ノールウェー當局は我々の寫眞機の携帯をも禁止してしまつた。



第6圖 友を乗せた飛行機來る(著者)